

An anime-style illustration featuring three characters in a park-like setting with large cherry blossom trees in the background. On the left, a young boy with glasses and a blue jacket stands next to a woman in a grey dress who is resting her head on her hand. In the center, a girl with long black hair and red glasses is running towards the right, looking back over her shoulder with an open-mouthed expression. On the right, a boy in a dark blue sailor suit is running alongside her, also looking back with a wide, open-mouthed smile. Pink cherry blossom petals are falling around them. Overlaid on the bottom half of the image is the title '終の三姉妹物語' in large, stylized red Japanese characters with a white outline.

終の三姉妹物語



それは美しき三姉妹が

堕ちて行く物語

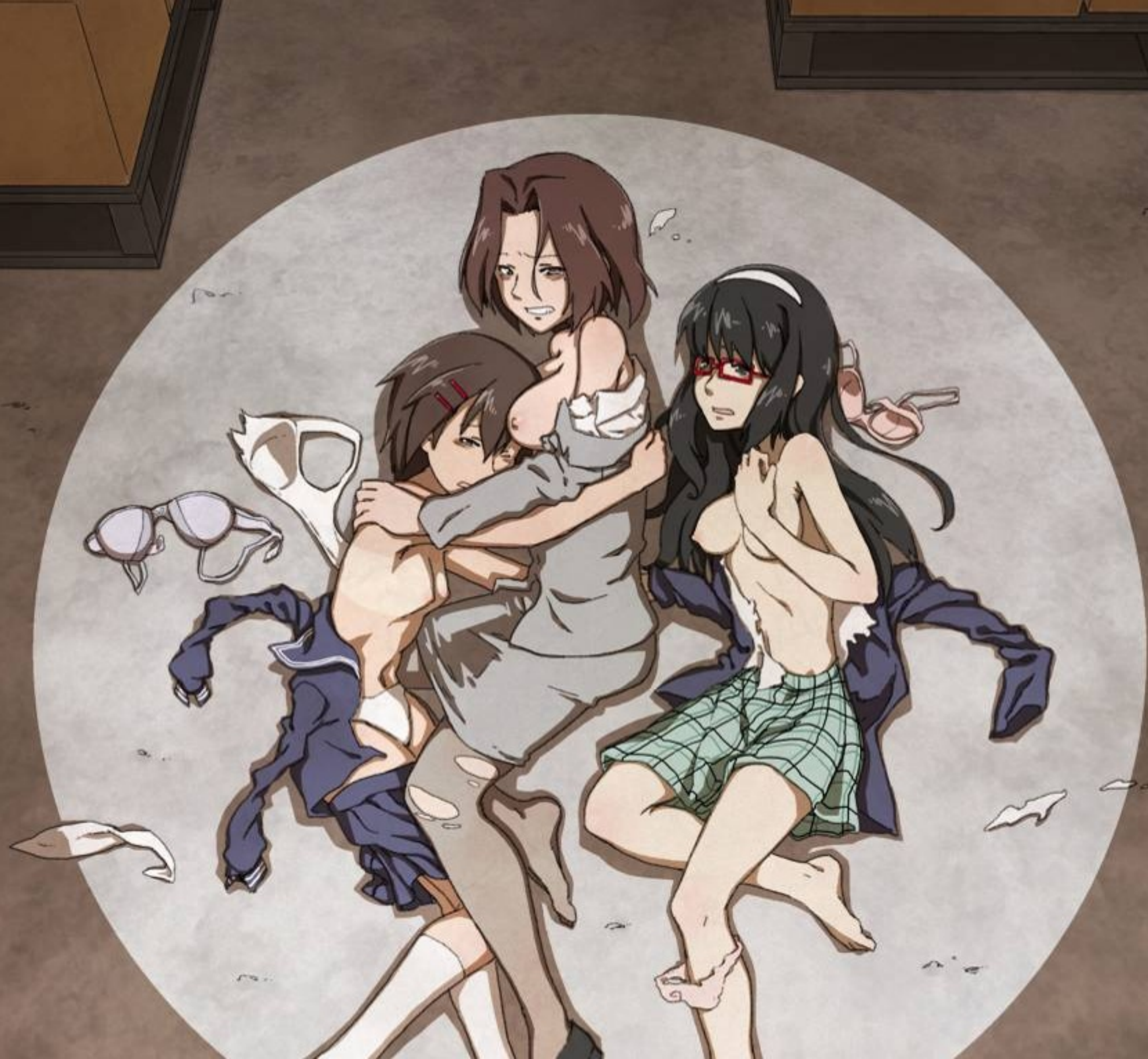




長女

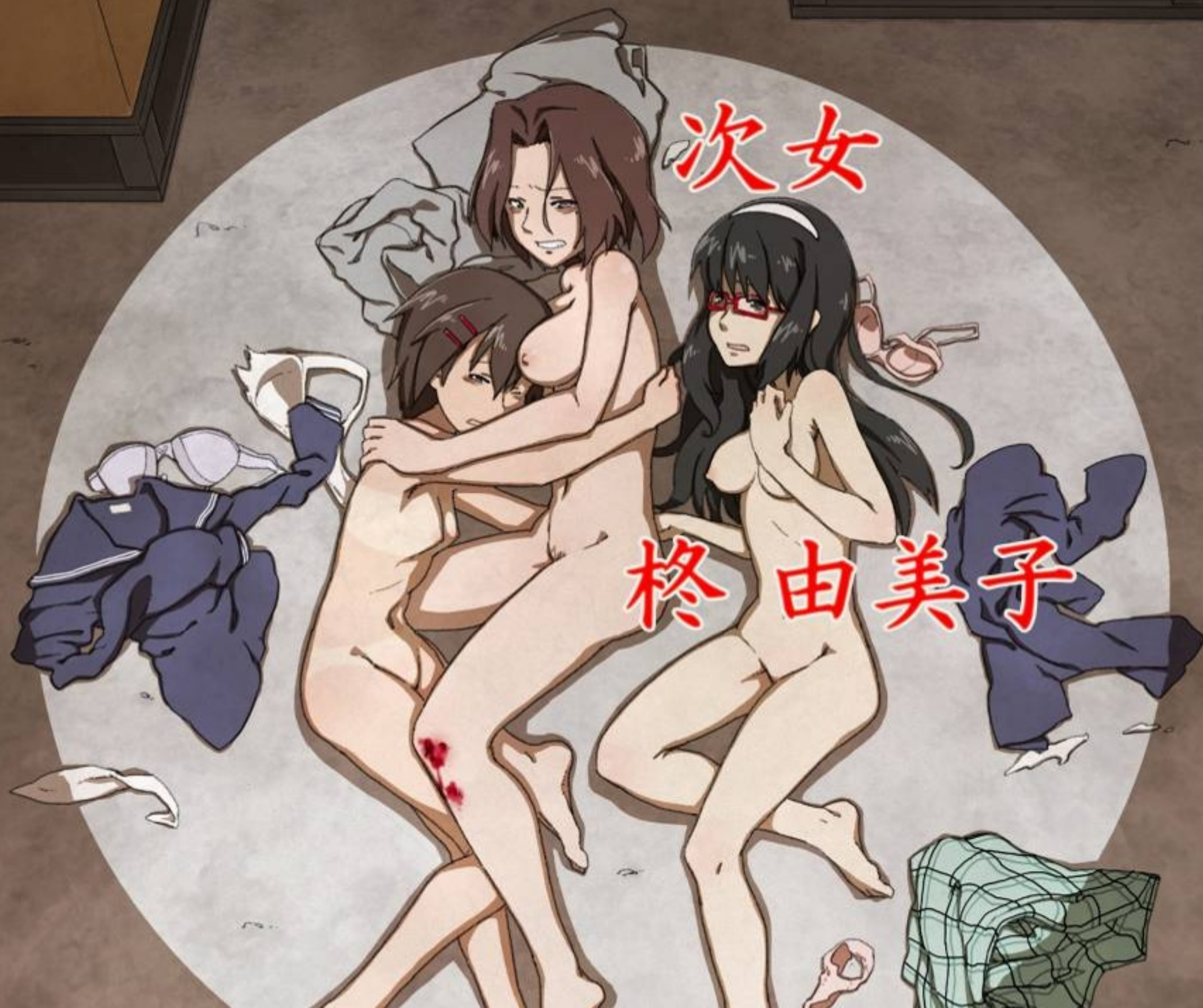
柊 栞





次女

柊由美子







三女

終亜衣





落
花
之
章
柊
栞

柏木 權
150cm

柊由美子
163cm

柊 栞
159cm

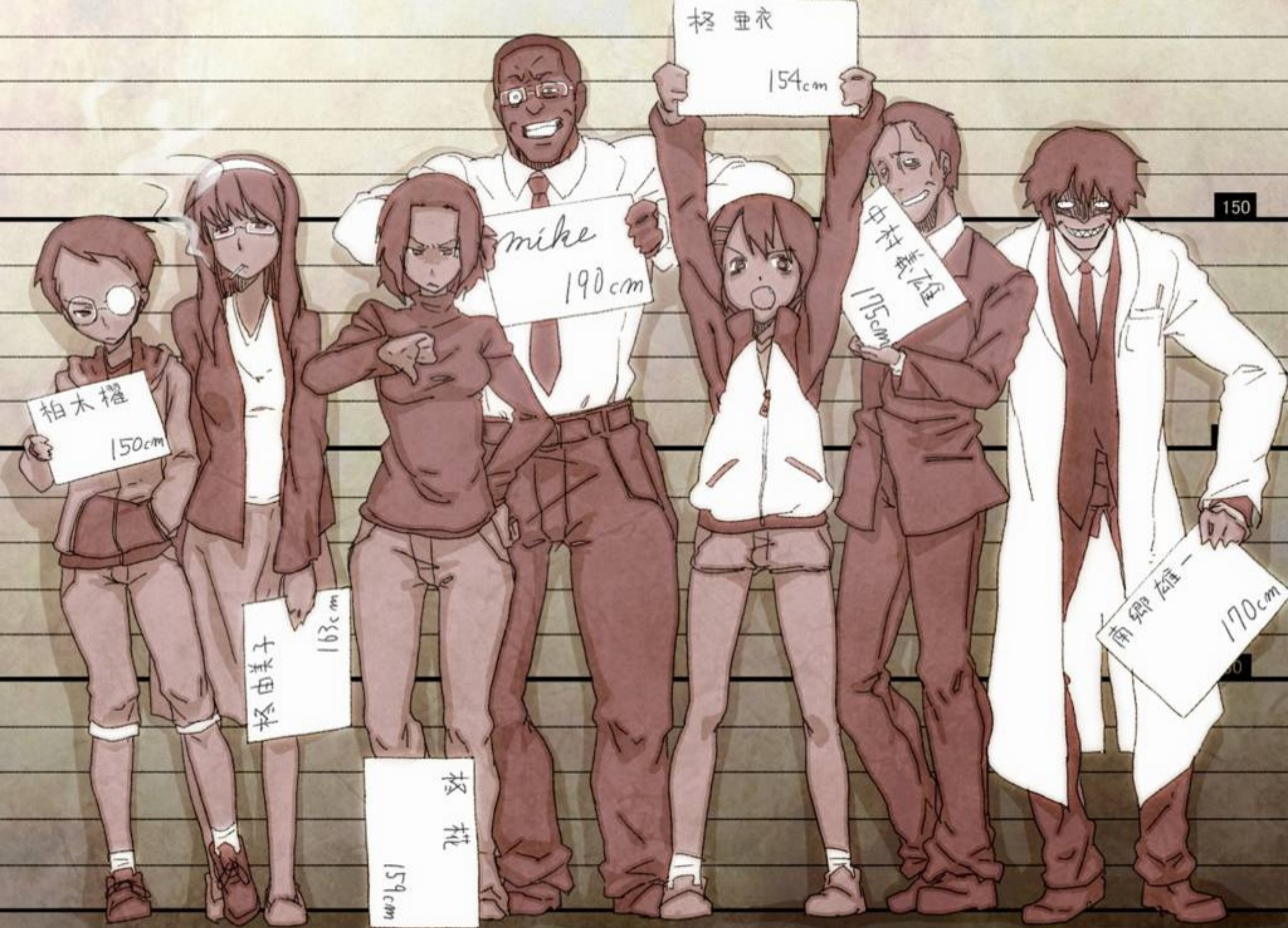
mike
190cm

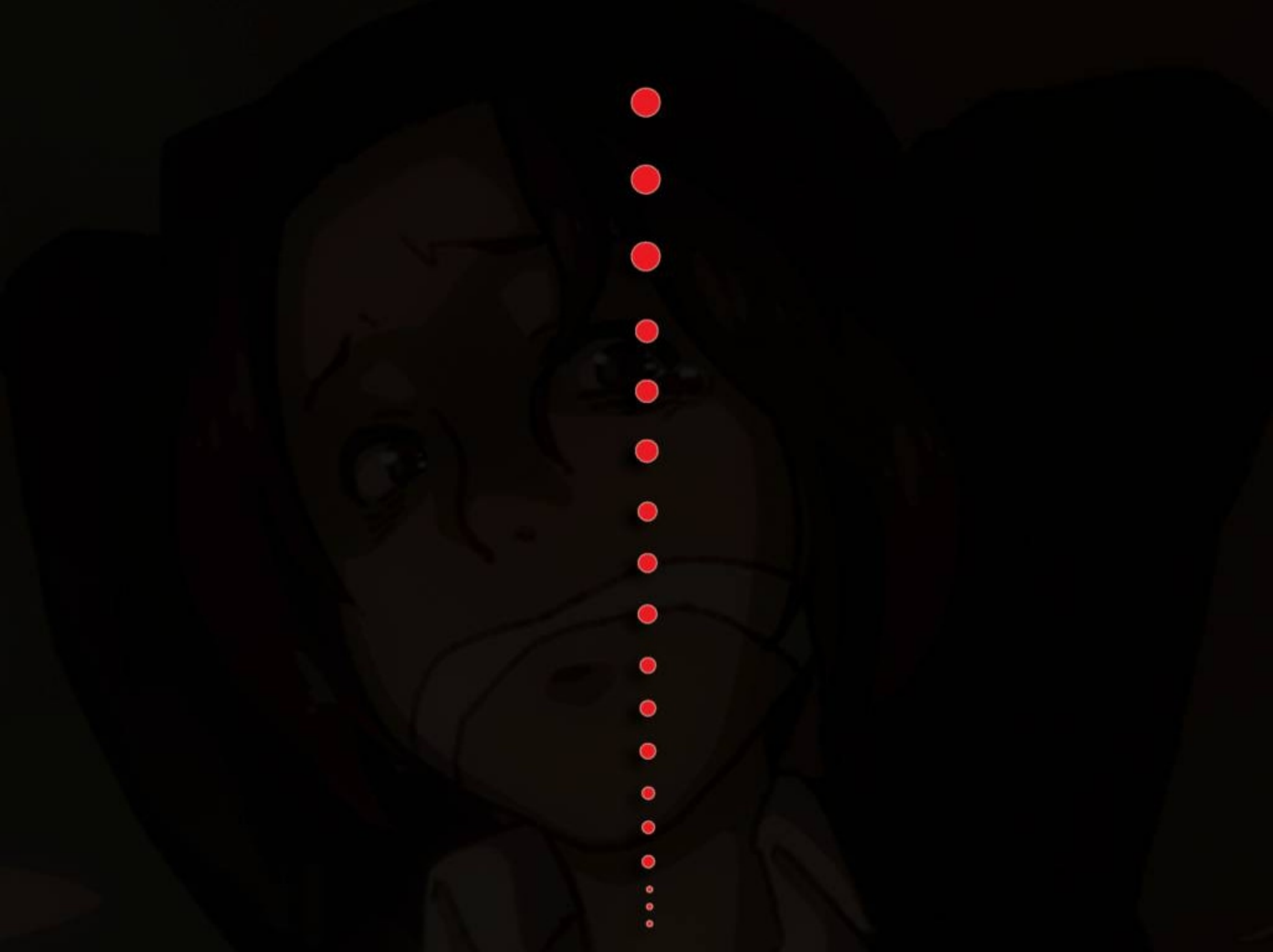
柊 亜衣
154cm

中村 美花
175cm

南郷 雄一
170cm

150





夢を見た……



夢を見た……



酷く魅力的な……



酷く魅力的な……



滴るほどに淫靡で……



滴るほどに淫靡で……





押えようのない獣欲……



押えようのない獣欲……



欲望に満ち溢れる彼女の夢を……



欲望に満ち溢れる彼女の夢を……



闇の中から浮かび上がる彼女の顔……



闇の中から浮かび上がる彼女の顔……



絶望と恐怖に怯えている……



絶望と恐怖に怯えている……

慈悲を乞うかのような.....



慈悲を乞うかのような.....



歪み引き變った顔……



歪み引き變った顔……



大きく見開かれ.....



大きく見開かれ.....



涙の滲む瞳……



涙の滲む瞳……





夢を見た。。。。。



夢を見た。。。。。

「んあぶう……ぐうう、んっああううう」

ぐうっおおおああ……うんっふう……」

その恐怖と絶望に満ち溢れ、大きく見開かれた瞳から、溢れんばかりに涙をため、彼女は私を凝視している。

「うっ、くっくうう……んっんっ、うっううう——！」

美しい唇から吐き出される苦の悲鳴は
噛まされている戒めによって封じられ

くぐもり喘ぐような呻き声だけを

口の僅かな隙間から漏れ出させ

恐怖と絶望の表情を浮かべたまま

私を拒絶するように

激しく揺れ動かされつづける彼女の頭部……

恐怖……絶望……怯え……怒り……

それら灰色の感情を浮かべながら見開かれている

瞳から、涙が溢れ出させなら、何かを訴えるよう

に呻き続ける彼女……



怯える彼女へと

私は、ゆっくりと手を伸ばして行く……

「うっ……くっくうう、んっんっ、うっううう——！」

口から吐き出される苦の悲鳴は

唇を割る様にして嚙まされた猿轡によって封じられ

奇妙で官能的な呻き声だけを

その僅かな隙間から漏れ出させている。

恐怖の表情を浮かべながら

私を拒絶するように激しく揺れ動かされ

振り乱され続ける頭部……

怯えの色を浮かべ、見開かれた瞳を見開き

その瞳から涙を溢れ出させ

必死に何かを訴えながら呻き続ける彼女……

恐怖と怯えに彩られ、涙で化粧をされている彼女の姿

を私は……ゆっくりと……舐める様に見て行く……

「んっあああ！ あっくうう……ぐう！」

その視線を避けるかのように彼女は足掻き

呻き声をあげ続ける。



頭上へと戒められている両腕と

すでに前を大きく開け広げられている上着……

「あうあああ……うっ、うぐうー！」

んっ、んんああううー！ んっぐうううあああ——っ！」

身を振り足掻く彼女の白いブラウスへと

私の手が伸ばされる………[J][r]

「はあひんっ、んごあああ、あっああぐうやああ——！」

ひいひいぐうっ、あああ………んっぐうー！」

ブラウスの上からでも解る膨らみ………

そして息づく胸へと手を伸ばし

一際高く抗いの呻き声をあげ続けている

彼女の白いブラウスを、私は強引に押し広げる！

「んあっあああ、あっあああ——！」

ブチッ！ と言う。白いボタンがはじけ跳ぶ音と

その跳ねとんだボタンが、床に落ちる。

カチンッ！

と言う小さな音が、ハッキリと聞こえる。



「うっくうぐっくうひいぐうっんっああ……んっう！」

そして大きく開いたブラウスの間から

彼女が身に着けている下着が……赤いブラジャーが垣間見える。

「あううう……うああ、はあぐうふうひい……」

啼く様な彼女の呻き声が、私をふるわせる。

怯えと恐怖に満ちた視線を

陵辱者たる私に向けている彼女が呻きつづける……

「うっ……うぐうううう……くうひい……ひぐうんああ
ぶう、ううぶうう……あぐうう……ううう……」

それは慈悲と哀れみを乞うかのような

弱々しい呻き声であり

大きく肌蹴られた棟が、震えるように動いている。

震え怯える顔が、何かを訴えるように

私へと視線を向け続け……何かを呻き、何かを言い……

訴え続ける……



「ひよぶううぐうう……んっあっあぐううああ……」

あううう！ おごおああ、あぐうう……ぐうっ！」

何を言い……何を訴えているのか……それを甘美に

私は理解し、彼女の方へと私は体を近づけて行く……

そして近寄る私から、少しでも離れようと

逃れようと、彼女の足が……腰が蠢き動く……

「はあひい、んっああ……んっああ……んっああ……」

タイトスカートから出ている黒のタイツに包まれた脚……

「んっぐうぐううう……んっごうう、あおっ！」

黒いタイツに包まれた美脚が蠢く……

それはまるで私を誘っているように見える。

「んっはあぎお、ごおぼおよう！ つぐうっあああ！」

スカートに包まれた腰の動き……

私は、近寄り彼女を見つめる……

「ううう……ぐうごあああ、あづぐうっ！」

舐めるように何度も……何回も……飽きる事無く……



入念に彼女の肉体を舐め回すように見続ける私……

「うっ……うっ……」

呻く様な声を出し、体を振る彼女……

「はいうっ、うっ……うっ……うっ……うっ……」

縛り上げ、戒められている両腕……

「んっぐっ、ぐっ……んっあああ！」

大きく開け広げられたブラウスから見える赤い下着……

「んっふう、ふう……ふう……」

ピンク色の間接照明に照らし出されている素肌の色……

「んっおおっおお……んっぐっ！」

私から逃れようと足掻く腰の動き……

「はあぐっ、あぐっ……んっんああ……あうっ……」

その全てが私の欲望をそそり続ける。





「はぁひいぐうぐうう……んっあああ、あぶううう！」

私の手から逃れようと足掻き、蠢く彼女の胸元へと……
その赤いブラジャーへと、私はジリジリと……焦らすかの
ように手を伸ばす。

「うふう、ふうう！ ううあつ……んっあぐううっ！」

胸へと伸びてくる私の手と、同様に近づいて行く私の顔
それを変互に……絶望的な眼差しで見ながら

哀願とも懇願ともつかない表情を浮かべ呻き続ける彼女……

「あううう、うぐううぐうぶううう……んっあああ……」

そんな彼女の顔を見……そして呻き声を聞きながら

彼女の胸にあるブラジャーを私は、一気に引き剥がした！

「ぐううあああ……！ うっうううああ……！！」

戒められている彼女の口元から

一際大きな呻き声が漏れ出す。

「ぐううううう……」

見ただけでわかる柔らかな乳房……

そしてふよりでありながら綺麗な乳首が

私の眼の前にさらされた。





スカートから引き出されたブラウスから、柔らかそうな
腹部が現れ、大きく息づきながら蠢く
スカートからブラウスの裾が引き抜かれ、彼女の腹部が
露出している。



「うっぐう、んっぐう、ぐうー!!」

少しでも露になった乳房と素肌

それを隠そうとするかのように

猿轡を噛み締めながら

彼女は身を振り、体を縮ませようと身動きをする。

「んっふう、ふうひい!!」

同時に少しでも私の手から遠ざかり

逃げようと身を振らせながら足掻く彼女の姿……

「ひい、ひい……はあひいぐうう……ううう……」

白い乳房が、体の足掻きに合わせ震え動く……

「はあひいひいぶうぐうう、んっあぐうう……」

白い腹がブルブルと震え、揺れ動く……

うねる様に動く腰が、妙に私を惹きつける。

「くう……ぐうう、ぐうー!!」

羞恥と屈辱の呻き声を漏らしながら、足掻く彼女……

「ぐう……ううああ、んっああ!!」

しかし私は、彼女を逃がさない……





「あんっ、んっあああ——！」

スカートの留め金を引き千切り！

そのまま一気にスカートを放り出すように引き脱がす。

「んっ、んっ、うういやあがああ——！」

剥ぎ取ったスカートを、宙へと放り投げる。

「あぐああ——！」



スカートの中に隠されていた彼女の美脚、黒いパンスト

それに包まれ、美麗ではち切れそうなほどに艶かしい

その美脚が、私の眼から何かを隠そうとするかのように

恥じらいを見せながら蠢く……



「うっ、ううう……くう！」

必死に……そして滑稽に身を振じらせながら
抗いとも苦鳴とも聞こえる呻き声……

音を、戒められている口から漏らし続けながら
蠢く彼女……

「はぁぐう、ぐうやぁんっうぐうひい！」

はぁぶううう

う……んっあああ、あうううああぐう！」

露になっている胸が震える……露出した腹部が蠢く……
黒いタイツに包まれた下半身が震え蠢く……





そしてパンスト越しに見える小さなショーツの形

「んっ、んっあああ……ぐううう、んっぐうああ……」

その小さな布されの影に対して

私は欲望を感じた。

「うっ、うっ、あああ、あうううあああっ！」

これ以上は脱がされまいとで言うように

抵抗の呻き声を漏れ出させながら

足を蠢かせ、黒いタイツに包まれた太股を打ち震わせ

下半身を足搔き蠢かせ

必死の抗いを続ける彼女の姿……



「ぐう……ううああ、んっああ！」

私を見る瞳から涙をこぼれださせ

半裸となりながら……

それでも足掻き続ける彼女の姿は

酷く扇情的であり、そして魅力的であり……

私に、一層の欲望を滾らせてくれた。





「んっああ、あううう……うああっ！」

ぴっちりと彼女の足を包み込んでいる黒いタイツ、その
縁にへと私は手をかける。

「はあうう、んっあああ、あぐうう……うああああ！」







身に着けている黒いタイツを脱がされまいと、必死に足を暴れ、動かし続ける彼女であつたが、それは無駄で無意味な抵抗でしかなかつた。

「んっあああ——っ——！」

ずるり……彼女のはいていた黒いタイツを、強引に太股の辺りまで引きおろす。

「ひいぶうう、ぶうんっうぐうう——ああうう……」

抵抗無く、引き下ろされた黒いタイツの下から

胸に着けていたブラジャーと同じ色の赤いショーツ……

それが半分剥き出しとなった下半身の上に現れる。



「うっ……うっ……あぁぶっ……」

露出した赤いショーツ、それを見られた事に対して
硬く両目を閉じ、恥かしさに顔を染め

僅かにくぐもった呻き声を漏らす彼女……

そんな彼女の姿が愛しくも私の嗜虐を誘う……







太股の途中まで引き下ろされた彼女の黒いストッキング

「くぅぅ……」

暴れ蠢く続けている彼女のストッキングへと

私の指先がかかる……

「はぁうぅうぅ！」

するり……と、ストッキングは、何の抵抗も無く彼女の足
から引き抜かれる。

「うっ……うぐぅ……」

後には、剥き出しとなった白い太股と赤いショーツに
包また魅惑的な下半身が、私の眼にさらされていた。



両腕を戒められ、上半身は肌蹴た上着とブラウス
そして下半身は扇情的な
赤いショーツ一枚だけと言う姿で
恐怖と屈辱に怯えながら横たわる彼女の姿を
私は念入りに視姦する。

「うんうん……うんうんぐうつつ……」

泣く様な……呻く様な声を出しながら
恥辱に震え続けている彼女……
そして彼女に残されている最後の一枚へと
私は手を伸ばして行った。





彼女が着けている赤いショーツ……その両端を掴む

「はあぐうぐうう、あぐうつう——！」

羞恥に体を震わせていた彼女が、その瞬間に再び暴れだす。
それを無視して、一気に赤いショーツを脱がせる。

「うっううああつ——！」

一際高い悲鳴……呻き声が、戒められている彼女の口か
ら漏れだす。

「あうう……ぐうう……」





柔らかそうな白い尻が剥きだしとなり
私に曝される。

「うぐうぐうぐう……んっあああ！」

必死に腰を捻り

足を閉じ合わせ

露にされた部分を隠そうと

彼女は必死に下半身を足掻かせるが

それは同時に

酷く滑稽でもあった。

「んっあああ、あっあああ……うやああっ！」

それでも彼女は

身をくねらせながら、全身で私を拒絶しつづける。



顔を背けながら抗いの呻き声を出し

全身で激しい抵抗を続ける彼女の姿

揺れる乳房……

脈打つ腹部……

震える太股……

閉じられたままの股間……

「んっ、んっやあっ！」

んっ

「んっ、んっやあっ！」

その閉じられている股間を強引に押し広げようとするが

彼女は抗い、足掻き続ける。

「うっ、うっうあぁあ！」

うっ

「うっ、うっうあぁあ！」

尻にかかった獣のように叫び、暴れる彼女……

股間を閉じ合わせ、私に大事な部分を見せまいと

私を近づけまいとするかのように

頭を……身体を激しく振り乱しながら

彼女は抵抗を続ける……



続きは製品版にて...

どうして...